



3月 園だより

令和2年2月26日



「巣立ち 一何を子どもたちにー」

園長 田中典彦

寒い冬であろうと、暖冬であろうと、梅の花が春の到来を告げると、木々の枝に新しい芽がスタートの準備を始め、息吹を感じ取ることのできる季節となりました。

このころになると、年長のみならずから聞こえてくるのは、小学校のことです。昼食を一緒にいただいていると、「僕は広沢小学校へゆくんだよ、この子は何々小学校だよね、〇〇ちゃんは別の学校、みんな一緒だといいのになー。」ちょっとさびしい気持ちもあり、そして楽しみでもあるような会話です。子どもたちにもすでに前に向かっての心の息吹が準備されているのです。

幼稚園では、年長組の園児は小学校へと進み、年中、年少組の子どもたちはそれぞれ上の級に進みます。それにつけても一年という短い間にも大きく成長した頼もしい姿を目にできて嬉しく感じます。わたしの部屋から見える子らの姿に「あんなだった子がこんなになったんだ」と感心してしまいます。人としていただきたいのちの成長という素晴らしい力なのだと感動します。

一転してこの時期、保育者には「この子たちに何をしてあげられたかなー」という気持ちが残ります。子育ても教育も同じようなもので、その時にすぐに果が現われたり目に見えたりするものではないと思います。決してそこに代償を求めるべきものではないのです。いつか芽を吹く見えない力を与えられたらそれでいいのでしょう。人生といわれる旅の中で、たくさん出会うであろう悲しみや苦しみを乗り越えて生き抜く力を子どもに与えることは、自分の価値がいかに大きいものであるかを常日ごろ伝えてあげることであるとされています。ゴータマ・ブッダが自らの旅立ちに残された教えを、今は園を巣立ってゆく素晴らしい友達たちに伝えたい。「自燈明 法燈明」(自分自身をともしびとし、真理をともしびとして生きてください)

小学校へ入学すると、あちこちの幼稚園から新しい友達がたくさんやってきて、小学校という社会をつくれます。5歳も上の兄や姉と一緒に生活となるのです。友達も多くなり、周りの環境(縁)が変わります。この周りの変化が、子どもさんたちを成長させるのです。まさに仏教の言う「縁が変われば因(私)が変わる」であります。その中で大きく育っていつてくれることを願うのみです。慣れるまでしばらくは、不安や怖さを感じることもあるでしょう。こういう時こそ保護者は子どもさんたちにより関心を傾けてほしいと思います。深い関心こそ愛なのです。しっかり「親」をしてください。わたしも今年度で卒園することになりますが、少し離れたところから、木の上に立って見守りたいと思います。ののさまの教えの通り、いつも笑顔と手を合わせることを忘れないで「元気、勇気、やる気」をもって、おおきく育ってくださることを楽(ねが)っています。